

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370069

研究課題名(和文)「聖なるものの顕現」における画像・造形物・言葉の働き - 画像資料と儀礼から -

研究課題名(英文)Functions of Image and Text in the Course of Hierophany

## 研究代表者

細田 あや子 (Hosoda, Ayako)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：00323949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、画像、造形物および言語によって表出される「聖なるものの顕現(ヒエロファニー)」の過程を分析し、画像や造形物、言葉が異次元間を結ぶメディア(媒体)という機能のほか、聖を創造、開示する働きも有する事態を考察した。具体的には神託、夢、幻視に関する文書と画像資料、および儀礼文書の解読をとおり、不可視・不在なるものの現前化の仕組み、聖化の働きを解明した。これにより、宗教と表象造形に関する研究に新たな視点を取り込むことができた。

研究成果の概要(英文)：This research analysed the strategic deployment and complicated functions of visual representation and oral compositions in the course of hierophany in religious cultures. We found that visual representations, that is, objects such as statues and language (prayers, incantations) play an important role not only as media vehicles between divinity and people, but also as a function of producing and expanding the sacred dimension.

研究分野：宗教学

キーワード：聖なるものの顕現 儀礼 祈り 通過儀礼 像・イメージ エージェンシー 生動化

## 1. 研究開始当初の背景

聖なるものの顕現に関する考察はすでに長い伝統がある。神託や啓示については、哲学的、神学的、思想史的に議論され、夢の類型化も古くからなされてきた。幻視や幻聴、憑依なども心理学や人類学、民俗学の分野で成果をあげてきた。だが聖の顕現の経験が宗教実践(祈りや儀礼など)とどのように関わっているのか、さらにはそこで図像、造形物、言葉の力がどのような役割を果たしているのか、という点まで踏み込んで論じた研究は多くない。また、聖なるものの顕現が描かれた画像についての宗教史的考察もまだ不十分で、宗教文献研究と美術史研究とが別個になされている状況である。

研究代表者は、中世ヨーロッパの神秘主義者、幻視者(主にヒルデガルト・フォン・ビンゲン)のテキストとその挿絵画像を解読して、幻視イメージと画像の特質の解明に努めてきた。それにより「スピリチュアリティの図像学」「幻視と夢の図像学」および「行為遂行的なイメージ(performative image)」

新たな意味や現実への働きかけを生み出す作用を持つ画像・造形物 という視座の有効性を精査した。

そしてこの研究成果にもとづくと、上記の研究上の課題を克服できるだろうという着想が得られた。つまり、図像、造形物を単なるメディアではなく、聖なるものの顕現の動因(agent)とみなすならば、宗教実践と図像表象、造形物との関連性に関し独創的な知見をもち出すことができると予想される。さらに、儀礼などで唱えられる祈りなどの言葉にも注目すると、聖なるものの顕現や、聖への変容の仕組みを宗教学的により深く解明する可能性についても着想を得た。

## 2. 研究の目的

(1) 「聖なるものの顕現の図像学」の構築：ヨーロッパ中世の幻視者の文書資料を解読し、続いてその図像(テキストをもとに視覚化されたもの)を分析し、聖の顕現の中で異次元を媒介するメディアの二方向に働く運動の描写の特徴を明確化する。さらに聖の顕現が祈禱やミサ、儀礼を行っているときに経験されることが多いことに注目し、祈禱図、儀礼図も比較検討して「聖なるものの顕現の図像学」を構築する。

(2) 「聖なるものの顕現の図像学」の東西の比較：「法然上人絵伝」の解読、分析を行い、ヨーロッパのキリスト教文化における聖の顕現の描写と日本の仏教美術におけるそれとを比較考察する。異なる宗教において、聖の顕現がどのようにとらえられているのか分析する。

(3) 儀礼の式次第とそこで唱えられる祈りが記された文書の解読を通し、宗教実践の場で、言葉や図像、造形そのものが聖となる過程を

分析する： 儀礼で用いられる言葉(祈り、呪文)、図像、造形の機能、意義を包括的に検討し、それらが持つ異次元間を結ぶメディアという機能の変容、消滅し、言葉や像、造形物、建造物そのものが聖を創造、開示しうる事態を検証する。

## 3. 研究の方法

(1) 聖書や聖人伝、幻視者のテキストおよび図像、さらに儀礼図、礼拝者像にも注目して「聖の顕現の図像学」を構築する。

(2) 言葉、図像、造形物、および儀礼の行為遂行性を考慮に入れつつ、それらの聖化の過程、および宗教実践におけるメディア機能の生成と変容について検証する。

(3) 儀礼の調査、神託や夢、幻視の文書・図像資料の分析から、祈りや儀礼が聖なるものの顕現に深くかかわることを明確化する。図像、造形と場の聖化の過程の考察により、聖の顕現の過程で図像や造形が言葉とともに中核をなすこと(聖の創造、開示)を検証する。

(4) 以上の研究について、研究代表者が属する学会や研究会で発表、報告を行い、そこでの討論をとおしてさらに考察を深めてゆく。

## 4. 研究成果

(1) 「聖なるものの顕現の図像学」について：「聖なるものの顕現の図像学」を解明するために、ヴィジョンや夢に関する資料として、ハインリヒ・ゾイゼの著『範典』、および法然の伝記を表現した絵巻「法然上人絵伝」(知恩院)を解読、分析した。

『範典』を読むと、修道院内での個人的な瞑想や沈思、イエス像や聖母子像などの前での祈り、懇願、あるいは賛美や称揚の言葉を唱えることが、ゾイゼがヴィジョンを得るきっかけとなっている。実際に目に見えるもの、耳で聞こえるものとおして、不可視なもの、心の声を体験しており、外的イメージと内的イメージが混ざり合っている。磔刑像などの彫刻物と神のヴィジョンが異次元間を超越し、重なりあい融合する。祈りの言葉と身体動きが相互に関連し、ヴィジョンが開かれる。イエスの受難の身体を見つめ、それを自らの身体にも刻印させ、霊的ヴィジョンを体験するゾイゼにおいて、肉体と精神の分離も生じないということが明らかとなった。彼のヒエロファニーの体験が、著作からはっきりと読み取れた。

「法然上人絵伝」において見いだされる、ヴィジョンの情景、阿弥陀三尊像や勢至菩薩像の彫刻、夢の善導、さらには法然自身などを絵画化、造形化する行為は、それらを具体的なものとして形にあらわし、本尊として礼拝するためといえる。それらを前にして祈り、儀礼を捧げることにより、浄土や阿弥陀のイメージや、称名念仏の教えなどがより具体的

なものとして、人びとのなかに刻印される。このように『法然上人絵伝』には、宗教的実践において絵画や造形物がどのように用いられているのか読み取れる場面　メタ絵画　が多く見いだされ、イメージへの礼拝の意義が積極的に認められる。日々の実践においてイメージがひろく活用されていたことが理解される。

以上のことから、ゾイゼや法然の霊性生活において絵画や造形物が儀礼という実践のなかでパフォーマンスティヴィティをもつということが明確となった。「聖なるものの顕現」の図像の特徴を深めることができた。

(2) 「幻視と夢の図像学」の精緻化。研究代表者は、聖書内の夢の記事やヒルデガルト・フォン・ピンゲンのテキストをもとに、「幻視と夢の図像学」を考察してきたが、上記(1)の研究成果により、さらにその特徴を浮き彫りにすることができた。

すなわち、ハインリヒ・ゾイゼの著『範典』解説、分析した結果、次元の異なる場を表現したヴィジョンや夢の図像は、見方によって多義的な解釈を可能とさせるため、ゾイゼの『範典』写本の挿絵においては、これまでに検討してきた三つのタイプ（幻視者のみが描出されているもの、幻視者とヴィジョンの内容があわせて描出されているもの、幻視の内容のみが描出されているもの）に分類することが難しい場合が多いことが明らかとなった。

したがって、なぜヴィジョンの図像が多く描かれたのかという点に着目し、聖なる空間の顕現（ヒエロファニー）であるヴィジョンが、人間に対してどのように表現されているか、聖の空間がどのように表現されているかということを検討した。それによって、祈りに対する応答というゾイゼのヴィジョンの図像の特徴が明らかとなった。祈りに対する応答として聖母子像や十字架磔刑像が生きているように手をさしのばしたり動いたりする表現は、宗教実践で用いられる祈念像などの造形物が力、パフォーマンスティヴィティ（行為遂行性）を有し、それを視覚化した図ととらえられるのである。

(3) 儀礼文書の解説による儀礼の力、造形物のパフォーマンスティヴィティについて。

宗教的コンテクストにおける造形物のパフォーマンスティヴィティについては、古代メソポタミアの資料から、新年祭の儀礼について分析し、そのときに行われる神像行列を考察した。神像を用いて占いをするという文献からは、神像が生きている神自身のように理解されていることが明らかとなった。毎年のはじめに行われる新年祭において、その年の豊饒や安寧を占う際、神像（＝神）がきわめて大きな役割を果たすことが明らかとなった。

古代メソポタミアの口洗い儀礼の文書の解説をとおり、神像が生きた神ととらえられていく過程を検討した。その結果、通過儀

礼の特徴として、分離、過渡、統合の段階を繰り返しながら、神像は神へと変容してゆくことが示された。物体である像が、命をもった神としてとらえられてゆく現象が、聖なるものの顕現といえるが、そこには儀礼で唱えられる祈りや捧げ物の所作などが重要な役割を果たすことも明らかとなった。造形物や言葉が聖の顕現をもたらすことが、儀礼文書の解説をとおして明確となった。

(4) 3年間の研究をとおり、エージェンシー、エージェントという理論を用いて、宗教造形物の機能を考察することがきわめて有効であることが明白となった。ものにも命や靈魂が宿り、行為の主体となりうるととらえられる事象が認められること、人間以外のものや自然物とのあいだにもコミュニケーションが成立するといった現象について、儀礼文書や宗教実践が描写された画像分析をとおり、新たな知見が得られた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 細田あや子「古代メソポタミアの神像の口洗い儀礼」『人文科学研究』138, 2016, pp.141-176（査読無）。

(2) 細田あや子「ハインリヒ・ゾイゼの『範典』写本における永遠の知恵」『比較宗教思想研究』13, 2013, pp.63-99（査読無）。

〔学会発表〕(計4件)

(1) 細田あや子「祈りとヴィジョン　ヒルデガルトとゾイゼを例にして」上智大学中世思想研究所、招待講演。2016年2月28日、上智大学、東京都千代田区。

(2) 細田あや子「イメージと儀礼」日本宗教学会第74回学術大会、2015年9月6日、創価大学、東京都八王子市。

(3) 細田あや子「古代末期のユダヤ美術」日本宗教学会第73回学術大会、2014年9月14日、同志社大学、京都府京都市。

(4) 細田あや子「宗教芸術のパフォーマンスティヴィティ」日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、國學院大學、東京都渋谷区。

〔図書〕(計4件)

(1) 細田あや子「ハインリヒ・ゾイゼのヴィジョン」pp.167-199.河東仁編『夢と幻視の宗教史下巻』リトン、2014（総頁304）。

(2) 細田あや子「異時空間を往還するキリストの身体」pp.213-235.栗原隆編『感性学 触れ合う心・感じる身体』東北大学出版会、2014（総頁312）。

(3) 細田あや子「生動するイメージ、刻印されるイメージ」pp.238-259.市川裕編『世界の宗教といかに向き合うか』聖公会出版、2014（総頁325）。

(4)細田あや子「祈りの言葉とイメージの力」  
pp.160-177. 栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版、2013 (総頁 234)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

細田 あや子 (Hosoda Ayako)  
新潟大学 人文社会・教育科学系 教授  
研究者番号：00323949

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：